蘇芳集

狐火

高橋　さえ子

峡暮れて稲架を怖しと思ひけり

土臭き雄鶏一羽山眠る

氷る夜の千年杉の闇匂ふ

湯疲れや町のあかりが冷え冷えと

埋火や戦災といふ祖父母の忌

初雪の富士を仰げばよきあした

狐火を見しとはぐらかされてをり

去年今年

青山　丈

来た人に綿虫の寄る浄閑寺

電柱に凭れて暮れる飾売

探梅の蕾ばかりの日でありぬ

煎餅のまあるいままで去年今年

人日の列のまん中ほどに居る

人日の低いガードをくぐりけり

松過のゴマのふりかけ午飯かな

いつしかに

宮尾直美

椿の実爆ぜて家居の月日かな
かさこそと味噌蔵に降る木の実かな
寺町といへど名ばかり懸大根
日差よき小駅の裏の花八ッ手
風の日のしろがね照りに鴨の海
いちにちにふたつの訃報ふくろふ啼く
いつしかに障子襖の無き暮し

枯野

八木下末黒

荒縄と木槌運ばる松手入
都電来る桜もみぢの飛鳥山
立冬の都電大きく曲がりけり
ジインズを干すその先の枯野かな
凩を歩くコートの狐色
柊のつぼみ小粒や香をつつむ
木枯や傷痍軍人在りし日を

鰊鉢

吉田幸敏

日の当たるその一本の初紅葉
初鴨の水の流れに逆らはず
蒼穹に恙あらねば雪迎へ
冬立つや釉たつぷりと鰊鉢
絵タイルは横濱ブルー冬鷗
髪置の精一杯を負ひ帰る
いつのこととともなき色に帰り花

冬の手紙

小川美知子

喉少し渇いてをりぬ櫨紅葉
初冬の明るい水へ歩み寄る
父と子に父と子が来る冬木立
冬草に坐れば川の流れけり
理科教師音楽教師落葉踏む
待ち詫びし封書封切る冬椿
冬の手紙冬の切手が貼つてある

初冬の木

木内憲子

町川の色ととのへば冬来るか
末枯の風となるまで歩きたし
どの子にも日当る冬の立ちにけり
逆光の鳥の二羽ゐて初冬の木
指先に触れていよいよ枯あざみ
風音も万両もまだ仕上がらぬ
ひよんの笛吹きてはけふをせつなくす

よく晴れて

小島みつ如

よく晴れてコスモス原の摘みとり日
コスモス原黄の風船と児がよぎる
羊雲の尾がはがれくる秋桜
わが町に紅葉山あり川・海も
晩秋の一夜城址の誰も黙
仏壇のコスモス明り外は雨に
綿虫よ記憶違ひと娘に言はる

クリスマス

清水裕子

早立ちの露けき風を顔に
小流の音の鈴めくクリスマス
一陽来復水かげろふが杭濡らし
鳥翔ちて桜落葉のよく飛ぶよ
掲示板の裏にも掲示冬間近
短日の花瓶の口の丸さかな
全集の表紙を赤に文化の日

繊月青く

下平直子

さつきから踏切鳴つてゐる夜寒
寒がりの夫を大事に冬支度
日の庭を雀が弾む今朝の冬
有明の繊月青く干大根
たたまれし翅は花びら冬の蝶
地祭の幣飛んで来し冬田道
垣沿を試歩らし石蕗の花日和